

布団に寝かせても、朝目覚めてみると、やはり一つの布団に、頭と足を互い違いに寝ているのです。

また、雷が大変でした。「戦車が来た！」と言って、三人で押し入れに逃げ込むのです。恐ろしかった記憶が消えないのでしょうか。当分続きました。

逃げ歩いた一年間は、お風呂にも入っていません。お風呂で、三男が少し太ったと思います。片方が、片方の腕は細いのです。片方が太く、はれているのだと分かって驚きました。無医村で、医者がいません。

無一文で帰ったのですから、姑（しゅうとめ）に嫌みを言われても我慢しなければ仕方ありません。持って行き場のない怒りを私たちにぶつけているのだと思って、耐えまし

た。明日も分からない三男を、寝かせて看病してやることも出来ません。背負ってのお百姓仕事です。

十二月八日、満一歳ちよつとの短い命を閉じました。栄養失調でますます声も出なくなっていたので、次女も三男も寿命と思わなければ：と、自分自身に思い込ませるようにしていました。弟思いの次女と、せめてあの世とやらで仲良く暮らして欲しいなどと、複雑な思いでした。主人は「満州のものは、皆失ってしまった」とポツリと言っていました。

主人の体調も、まだ今一つという時に会社からの通知が入り、東京への復職が決まりました。舅（しゅうと）に作って頂いた背広一着が「全財産」で、一人東京へ出発しました。

私は幼い時、母の実家で習い覚えた麦わらの内職が役立ち、私たちの収入源になりました。子どもの教育費、衣料費、食費の全てに役立ちました。

朝は四時に起きて内職。子どもたちを送り出してからは、お百姓仕事の毎日です。究極に立つと涙は出ません。長女が「母さんはいつ寝るの」と聞いていました。

履物のわら草履作りも覚えまして。作り方が下手なので、一日で破れてしまいます。靴下も「スフ」ですぐ破れて、毎日、繕いばかりです。義父母のところへ大勢帰ったので、すから、食糧もありません。村中のカボチャを買ってきてくれました。「家の嫁は、何でも食べるから困る」と、こぼしていたそうです。皆が出かけた後で、二人で白米を食べ